

書道 I における漢字仮名交じりの書の制作のあり方をめぐって

——線質を中心に——

谷口邦彦

完成した作品のみが評価される書家の制作と、公教育での制作を混同してはならない。本稿は、新学習指導要領書道 I で必修となる漢字仮名交じりの書の取り扱いに関するものである。漢字仮名交じりの書には依拠する文字資料がなく、文字資料を依りどころに作品制作を行う書道においては異色の存在である。初めて書道作品の制作に取り組む高等学校 1 年にあつて、漢字仮名交じりの書の制作をどのように扱っていくべきか、これまでの実践の反省を踏まえ、「線質」の違いに着目して展開した一例を報告する。

はじめに

国語辞典によると、「創作」は「はじめて作り出すこと」「最初に作り出すこと」などの説明が出てくる。あらゆる分野の「芸術作品」がそうであるように、オリジナルのその人でしか作り出せないものが評価の対象となる。

翻って書道（「書」など他にも呼称はあるが、本稿では授業科目名にならって書道とする）においてはどうかというと、「創作作品」の評価は分かれる場合が多い。書道は文字を素材としており、長い歴史を持った文字を抜きにしては存在し得ない芸術である。書道の歴史は文字の歴史とともにあると言っても過言ではなく、遺されている膨大な文字資料（「古典」とも言われ、本稿では古典とする）の中に、文字の表現の可能性は出尽くしていると言われる。

したがって、書道の場合は通常「はじめて作り出すこと」のような創作は行われぬ。作者のイメージなり、意図なりに近い文字資料を探し、それを基に作品を制作していくという方法が一般的である。基にした資料に裏打ちされることによって存在感のようなものが作品に備わるのであろう。

ただし、これは資料の豊富な漢字制作と仮名制作に限って言えることで、新学習指導要領書道 I において必修の扱いになった、「漢字仮名交じりの書」（これにも「近代詩文書」など多々呼称があるが、学習指導要領にならう）においては、依拠する古典がないとされる。そのため、高等学校における書道の授業で漢字仮名交じりの書を扱う場合、漢字や仮名の作品制作にはない問題が発生することになる。

本稿では、これまでの漢字仮名交じりの書の実践の反省を踏まえ、導入段階の書道 I における扱い方

を再検討してみたい。

1. 漢字仮名交じりの書について

現代の書は現代の日常言語を基調とすべきであるとの立場から、戦後、書壇では新しい表現が追究されてきた。「前衛書」とは違ったスタンスでの創作活動であった。「古典派が墨守し伝承を守り抜いた漢字・仮名とは別のポジションにおいて現代書のひとつの顔でなければならない。（青木香流¹⁾）「近代詩文を書こうというのは、一種の批判精神というか、時代に対する批評……どういう形をとるかは別として、そうしたものが土台にならなくちゃいけない。」（和田青篁²⁾）など、書家それぞれで表現は異なるが、新しいものを創り出そうという気概は共通している。

もっとも、漢字と仮名を調和させて表現することは平仮名が使われはじめた平安時代からすでに行われている。その時代にはその時代にふさわしい表現があつていいという立場で漢字仮名交じりの書を理解したい。

2. 書道 I 各教科書における漢字仮名交じりの書の扱い方

漢字仮名交じりの書で何を表現するのかという問題を高等学校書道の授業にあてはめると、書家たちが目指す作品とは趣を異にするのもやむを得ない。公教育における作品制作は、出来上がった作品のみを評価するのではなく、制作途上の取り組みを含めて評価されるべきである。

漢字仮名交じりの書の制作を通して、何を学ばせたいのかについては、いくつかの視点があるように思う。「読める書」という漢字仮名交じりの書の特徴を生かして、伝えたい言葉を表現するなど新しい表

How Writing in both Chinese Characters and Kana Letters Should be Taught in "Shodo-I"

——How to Write with Suitable Strokes of the Brush——

Kunihiko TANIGUCHI

現の可能性があることは確かである。「古典が未確定という特異性を生かして、書の創作学習の山場として考えてもよいのではないだろうか。一つの経路として、書写の接点をなす整正な漢字仮名交じりの書から入って、「漢字の書」と「仮名の書」の臨書と創作による「変化と調和」の学習を経て、その上で「総合としての漢字仮名交じりの書」の創作学習によってまとめる、というあり方を設定することも考えられる。」(久米公³⁾)はその一例である。

ところで、教科書は漢字仮名交じりの書をどのように扱おうとしているのであろうか。手許にある8社の教科書を比較してみると次頁の表のとおりである。

①漢字と仮名をどのような方法で調和させようとしているか。②採用している古典③掲載している参考作品の作者名の三点について比較することによって、書道Iにおいて漢字仮名交じりの書がどのように扱われようとしているのかがわかる。

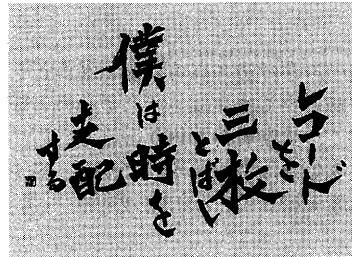
①については、基本的な考え方として、漢字主導か仮名主導か、または互いに譲歩させるの三通りで説明している。譲歩の方法としてF社が「線質」をあげていて注目されるが、方法の提示に過ぎないものがほとんどである。

②からは、①についての具体的な方法の視点として古典を媒介として漢字と仮名の調和を図ろうとしていることがわかる。漢字仮名交じりの書には古典がないとされてはいるものの、制作の手がかりとして提示されていると理解してよいだろう。それはまた、現代の書家たちの考える現代的な表現意図、例えば次のような「現代文体の書について伝承的な学書方式がないということは、それを必要としないからである。現代という時間帯は、休むことなく過去に流れ去ってゆく運命を負っている。現代書は単に過去の書というものに対しての対語ではなく、常に未来を指向して動揺し、固定化は許されないことを意味するものである。否応なしに現代文体の書はそうしたところに位置づけされていることを思うと、亜流類型によって伝承された従来の書の軌跡の上に現代の書は存在するものでないことを、現代文体の書をつくらうとする人たちは思想の基底として書作への姿勢を整えなければならない」(青木香流)のような意見からは外れるように思われるかもしれないが、高等学校1年生という導入期に自由な表現は無理である。

③については、いわゆる現代の書家ではない作者についてのみ拾ったが、高村光太郎が6社で採用されており、次いで会津八一が続く。両者はいずれも生前から書に造詣が深く、膨大な書作品とともに書のあり方について示した文章も数多い。しかし、作品自体が訴える内容は高等学校1年生には難解で、

授業で扱う場合は、教師の力量が問われることになろう。漢字仮名交じりの書の参考作品例は曖昧で、教師の好みに流され易い一面もある。

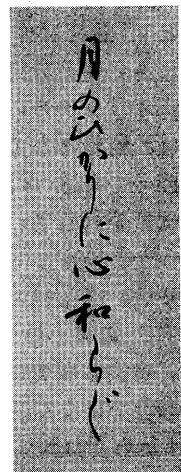
教科書に所収の参考作品例



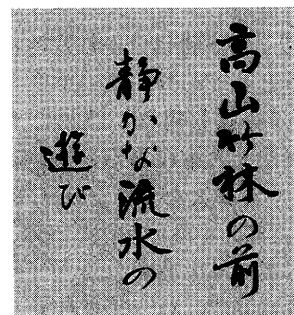
造像記
を基調とした



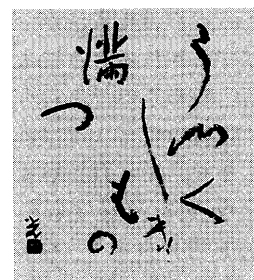
高野切第三種
を基調とした



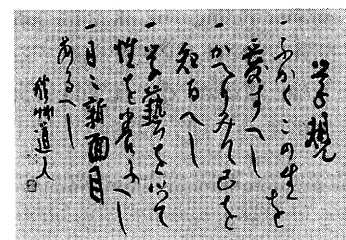
顔真卿を基調とした



蘭亭序を基調とした



高村光太郎



会津八一

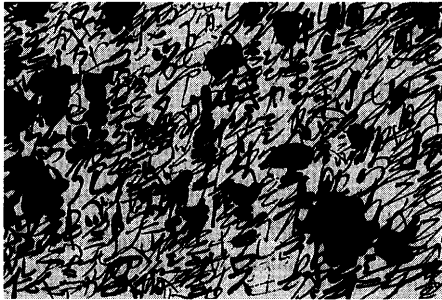
書道Ⅰ 各教科書における扱いの比較

	漢字と仮名の調和についての視点	取り上げている古典	参考作品
A社	①漢字の表現に仮名を調和させる ②仮名の表現に漢字を調和させる	顔真卿の書を生かして 蘭亭序の書を生かして 高野切第三種の書を生かして	堀 辰雄 大澤竹胎 岸田国土 石川啄木 武者小路実篤
B社		伝源俊頼 元永本古今集 伝藤原行成 近衛本和漢朗詠集	会津八一 赤羽雲庭 森田安次 水原秋桜子
C社	①漢字の線による表現 ②仮名の線による表現 ③たくましさを強調した表現	蘭亭序十藍紙本万葉集 粘葉本和漢朗詠集十高野切第三種 鄭羲下碑の趣による表現 顔真卿の書の趣を生かした表現	青木香流 日比野五鳳 清水比庵 石川啄木 中川一政 若山牧水 林美美子 河東碧梧桐
D社	①漢字を主体として仮名を調和させた例 ②仮名を主体として漢字を調和させた例 ③漢字と仮名を歩みよらせて調和させた例	九成宮醴泉銘を基調とした表現 北魏時代の造像記を基調とした表現 集王聖教序を基調とした表現 高野切第三種を基調にした表現	大澤竹胎 堀辰雄 高村光太郎 会津八一
E社	大字による漢字と仮名の調和 (半紙)		会津八一 高村光太郎
F社	①文字の大きさ・字形の調和 ア文字の大きさ・字形の調和をはかる イ用筆・線質の調和をはかる ウ配置・配列に注意する ②線質の調和と全体構成の工夫 ア柔らかくやさしい線による調和の例 イ硬く力強い線による調和の例	三宝絵詞（東大寺切） <楷書と仮名を調和させて書く> ①北魏の造像記の趣を生かす ②九成宮醴泉銘の趣を生かす ③顔真卿の書の趣を生かす <行書と仮名を調和させて書く> ①王羲之の書の趣を生かす ②粘葉本和漢朗詠集の趣を生かす ③杜家立成雜書要略の趣を生かす	小林一茶 高村光太郎 吉川英治 若山牧水
G社	(古典をもとにして) ①漢字の表現に仮名の表現を近づけて調和させる → ②漢字と仮名の表現を歩み寄らせて調和させる → ③仮名の表現に漢字の表現を近づけて調和させる → ④漢字と片仮名の表現を歩み寄らせて調和させる →	・三宝絵詞（東大寺切） ・定家臨 貫之土佐日記 牛欄造像記の特徴を生かして 蘭亭序の特徴を生かして 高野切第三種の特徴を生かして 張猛龍碑の特徴を生かして	高村光太郎 仙厓 上田桑鳩 会津八一 鈴木翠軒 森田安次 河東碧梧桐
H社	①漢字の表現に仮名の表現を合わせて仮名をやや強めに書く ②仮名の表現に漢字の表現を合わせて漢字をやや弱めに書く ③漢字と仮名の特徴を生かして両者を調和させて書く	①牛欄造像記 ②蘭亭序 ③元永本古今集	高村光太郎 会津八一 若山牧水 日比野五鳳
I社	A 運筆のリズムに統一感をもたせる B 書体、書風の調和を図る 1 仮名を強く書いて漢字と仮名を調和させる 2 漢字を優しく書いて仮名と調和させる 3 漢字と仮名、双方を歩み寄らせる	・「魏靈藏造像記」を参考にして ・「哀冊」を参考にして ・空海の書を参考にして ・「和泉式部統集切」を参考にして	高村光太郎 良寛 青木香流 棟方志功 河東碧梧桐

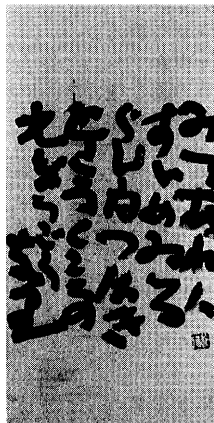
3. 漢字仮名交じりの書のこれまでの実践

稿者が高等学校書道の授業において漢字仮名交じりの書を取り上げたのは、新任間もない前任校においてである。前任校での実践は依拠する古典がないという立場にたって、書家ではなく、画家その他の近代芸術家の遺した文字作品を参考にしながら、用具・用材の工夫によって表現しようとした⁴⁾。

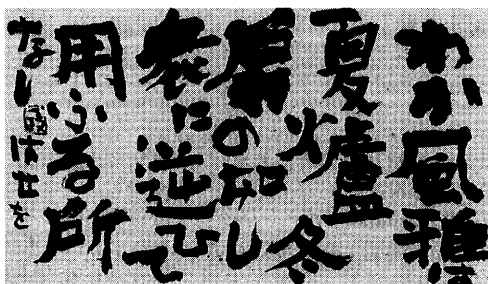
「読めるか読めないかの限界に挑戦」しようという目標が適当であったかどうかは別として、生徒の美しく整った文字が良い書だという固定概念を打破しようとする試みでもあった。そのため、成功すればおもしろい作品が偶然できることになるが、なかなか方針が定まらないという問題があった。ここに掲げたのはその参考にした作品と成功例（作品1、2）とである。



大澤竹胎 1955



勅使河原蒼風 1960年代



中川一政 1977



作品1



作品2

生徒作品は、用具・用材の工夫が組み合わせられて、概ね工夫を重ねたものが見栄えのする作品に仕上がっているかに見える。しかし、最大の難点は、字形の頼りなさである。書作品の場合、文字の持つ造形力は、作品を支える要素の一つである。その点平仮名の字形には幼さが目立つ。本校に転任し行った実践でも、同様の問題点が認められた⁵⁾。

また、漢字の創作とリンクする形で漢字仮名交じりの書を取り上げたこともある。ここでの問題点は、目指す表現がはっきりしている生徒がいる反面、どうしても意図する表現が見つからず、いわゆる手本を要求する生徒が少なからずいたことがあげられる。また、平仮名の字形の修正を図ると、線質に不満が残った。

作品1、2では確かに字形に不満はあるが、線質はあまり気にならない。よく見ると、それぞれの生徒はそれぞれ線質の違いを表現しようとしている（偶然とも見えるが）。

これらの実践を通して、字形と線質の不満が反省点としてあげられた。字形にこだわると線質がおろそかになり、線質にこだわろうとすると字形に稚拙さが目立ってくる。

4. 線質の違いを表現するために

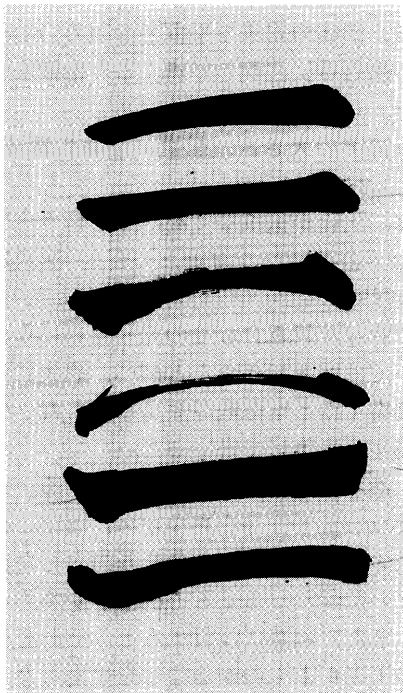
上述の二つの問題点のうち、字形に関しては、単体での学習が容易であるし、作品の構成や形式を吟味していく過程で解決を図ることは可能であろう。実際に、その後の実践において、漢字・仮名の古典

を基にすることで、不満は解消した。

ところが、線質の問題は、用筆法を中心として、用具・用材との関係、構成との関係など、いくつもの要素と関わってはじめて違いが表出される。その違いが書風となって表れるのである。したがって、何らかの表現を試みようとする場合、常に線質の問題が関わってくると言える。

漢字の書体は大きく篆書・隸書・草書・行書・楷書の五書体に分類されるが、書体それぞれ用筆が異なり、線質にも大きな違いがある。楷書についてのみ注目しても、書写で説明する「左上45°から筆を入れ、その角度を維持しながら引いていき、また入れた方向に筆を上げる」で書かれた古典はほんの一部であると言ってよい。時代や書者によって、筆を入れる角度は浅かったり深かったり、中には「鄭羲下碑」や褚遂良の諸作品のように逆から入れるものまで様々である。

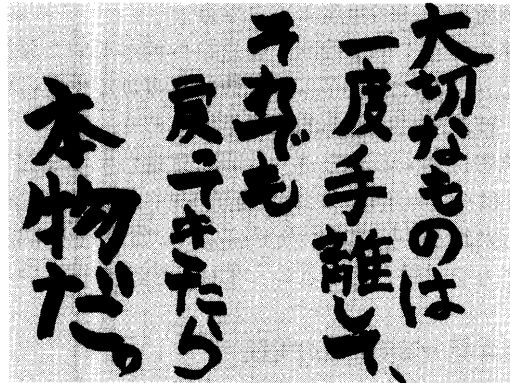
線質の違いを表現しようとする場合、まず、起筆部分に注目した。



楷書の線質の違い

これらの線質の違いを、漢字仮名交じりの書にあてはめても同様のことが言える。ここに掲げたのはある週刊誌で連載されているコーナーからの転載であるが、担当者(作品4)が読者の書いた作品(作品3)に答える形で書いている。これら二つを比較しても、起筆の工夫によって線質が異なることがわかる。読者の起筆は一応楷書的な用筆になっているものの工夫は感じられず、担当者に比べると迫力

に欠ける作品となっている。作品3の例は、書写の内容が理解できている生徒でも、書道の初学の段階で陥ることの多い作品パターンである。



作品3



作品4

大澤竹胎の書を評して天野一夫は、次のように述べている。「既存の平安仮名を指標とする技術主義的な定型的作品とは異なる、より素朴で原始的な生命を希求した。しかしそれは「前衛書」ではない。自ら身についた既存の書法を封印し、今一度、多様な線の質を試みることで、一気にかなの底辺を拡大したのである」(傍点稿者 朝日新聞1992年5月9日夕刊)。近代芸術家の書作品を見る時、その構成の面白さや用具・用材の工夫が目を引き、実はそこに陥穽があるのであって、まず線質があり、構成の面白さは副次的なものであると言えよう。したがって、高等学校書道においては、とりわけこの線質の違いと用筆の関わりを理解させておくことが大切で、これは漢字仮名交じりの書に限ったことではなく、書の作品を支える土台であり、表現をある程度決定づけるものである。

用筆を含めた技能に関わる学習と、鑑賞を含めた理論とが組み合わせられてはじめて書道の学習と言える。その際の着眼点として、書道Iでは「線質」を取り上げて進めることを提案したい。

5. 線質に注目した実践

対象：広島大学附属高等学校第1学年書道選択生
41名（男子31名，女子10名）

実施時期：1999年度1～2学期

生徒の実態：小学校時に書道塾へ通っていた生徒はかなりの数に上るが，ずば抜けて書ける生徒はいない。技能的には平均的な学年であろう。

学習に対する姿勢は，活発に意見が出るなど，意見をはっきり主張したい生徒が多く，これは作品制作にも表れる。技能ばかりではなく，書に対する見方，考え方を学習したいという生徒も少なからずいる。

< 1学期—漢字の書の実践 >

1学期に取り上げた資料（古典）を一覧で示す。高等学校1学年の最初に隸書を取り上げることに異論があらうかと思われる。しかし，線質特に起筆に注目した実践を行おうとする場合，書写で身につけている毛筆の用筆と異なる部分を取り上げて意識化するのが効果的であろうと判断したのである。予想通り，生徒の隸書への関心は高く，用筆への意識化はある程度成果を上げたと考えている。

限られた時間の中で，いささか平板な展開になったかと思われるが，篆書を除き（3学期以降篆刻で取り扱う予定なので）書体発達の順に沿った形で行っていった。

書体	内容	形式
隸書 (4)	曹全碑「有志」 木簡「有志」	半紙 半紙
草書 (4)	書譜「使転」 千金帖	半紙 半切縦 1/2
行書 (4)	集字聖教序 蘭亭序	半紙 半切縦 1/2
楷書 (6)	九成宮醴泉銘 孔子廟堂碑 鄭義下碑・牛概造像 記・雁塔聖教序を選 択して	半紙 半紙 半紙

()内は時間数

< 2学期—漢字仮名交じりの書の実践 >

第1次 文字の歴史を知り，仮名の成り立ちから字形の根拠を知る。(2時間)

平仮名の字形が稚拙にならぬよう，平仮名の字源を知り，字源の漢字の草書体を書くつもりで組み合わせることを確認した。規準とした形は教科書所収の「粘葉本和漢朗詠集」から集字したいろは歌

の一覧である。半紙に4字程度ずつ書いて確認した。
第2次 表現したい書風から漢字の古典を選び，その書風に仮名を調和させる。(2時間)

1学期に学習した漢字の古典を基に書きたい書風を選ぶ練習を行った。(書体を選ぶ→書風を選ぶ)半紙に書ける5～6字程度の短い文を用意した。

生徒が基にした古典

作者名など	人数
虞世南	15
王羲之	5
王羲之以外の行書	4
草書	4
歐陽詢	3
造像記	1
隸書	1
行書+草書	2

その後，漢字の用筆で平仮名を組み合わせさせていった。その際起筆に注意して書くことを徹底させるようにした。

第3次 文字の大きさ，配置，全体の構成の学習。(2時間)

題材は，生徒が抵抗なく書けるとい内容の文章を考えた。全員同じ「海鳴りの音」。形式は半切縦1/4に一行で書く。

前時で行った組み合わせの繰り返しになるが，漢字については字典できちんと調べ，忠実に臨書するつもりで書くことを徹底させようとした。平仮名も同じく漢字の用筆法で書くこと。

第4次 漢字仮名交じり作品を鑑賞する。(1時間)

教科所収の参考作品を見ながら，漢字と仮名の調和の方法の再確認，特に仮名を基調とした調和の方法や，互いに歩み寄らせる方法などがあることを紹介した。また，起筆に注目すると，それぞれの作品に用筆の工夫がよくわかることを確認した。

最後に前掲の，中川一政の作品を見てどう感じるかを記述させた。生徒の記述の中には，

- ・決して美しい字ではないと思うけれど，躍動感があつて力強い感じがする。「良い」という人と「別に」という人の二通りに分かれそうな作品だと思いました。
- ・個性的な書だと思うけど，どのように見たらいいのかわからない。書体などの知識を持たなければならない。
- ・にじみ，かすれがいいのだと思う。見あきない

作品だと思う。

- ・起筆にいろいろ変化がある。印刷ではよく分からないが、とても強い線で書かれているんだろうな。

など、思い思いに書いていたが、線質、特に起筆にこだわって見ている生徒は少数であった。鑑賞の際にも着眼点として意識させたかったが、その点反省せざるを得ない。

第5次 配置への工夫（2時間）

半切 1/3 へ、文字を配置する形を意識させた。三角形や四角形等の形を鉛筆で下書きさせ、その形に収まるように配置していく。最終的には、自由な形を想像しながら配置するよう試みた。

題材は、「海鳴りの音」に「遠い」あるいは「聴く」を加えた語句で前時に作った作品の用筆を生かしながら制作していった。

第6次 用具・用材を工夫することによって、作品に変化をつける。（1時間）

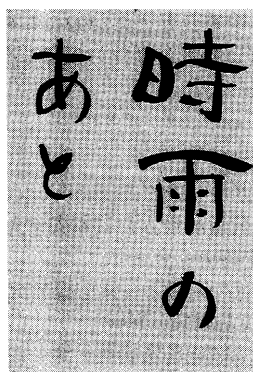
用具・用材の表現効果を確認する内容を設定した。前時と同じ題材、用筆、配置をそのまま使い、「墨色の変化」を主として表現させようとしたが、なかなか思うように変化をつけることができなかった。他との比較によって、変化の表現への関わりに気づかせたかったが、この段階では「にじみ」に対する忌避感があるように感じた。

この点、鑑賞活動を充実させるなどで補っていく必要がある。

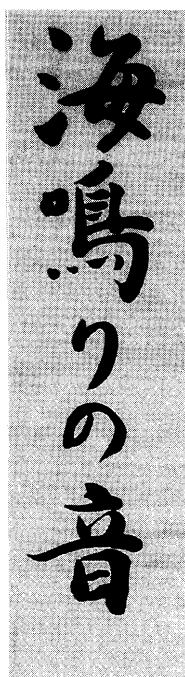
第7次 作品制作および鑑賞。（1時間）

最終的に仕上げた作品を教室壁面にそれぞれ掲示する。その作品の中から5点を選び、コメント用紙に感想を記入する。そしてそれらと比較しながら自分の作品について同じようにコメントを書き入れる。

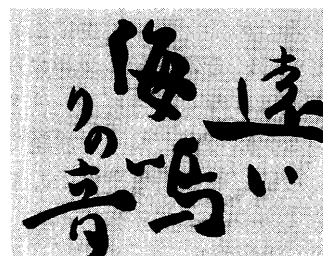
生徒 A の作品ができるまで



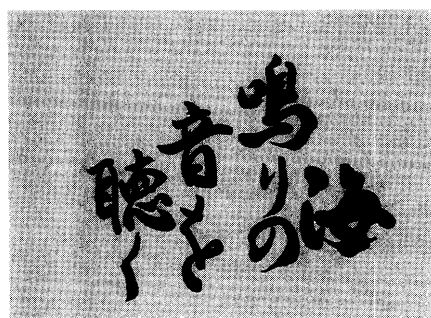
第2次



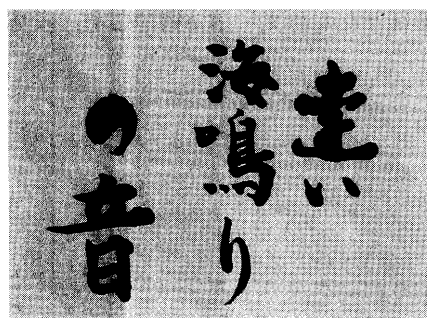
第3次



第5次



生徒 B



生徒 C

友人のコメントについては、それぞれの作者に渡すという方法をとった。友人がどのように自分の作品を見たかを知ることによって、学習意欲が互いに喚起できるものとする。

教師の評価は、それぞれの書いたコメントに付けて返す方法をとった。

おわりに——今後の課題

現時点の生徒の作品は、未熟で書道作品として鑑賞するにはまだまだ心許ないものがある。しかし、「線質に注目する」という視点で新たな制作と鑑賞学習に取り組みることにより、生徒は線質の多様さと広さを知り、書道に対する見方・考え方を深めていくものと思う。

漢字仮名交じりの書の導入の方法として、広瀬裕之は①実用面を重視した内容②漢字や仮名の古典を取り入れた内容③芸術面を重視した内容の三通りを示している⁶⁾。①については書写との接続、すなわち、幼稚園、小学校から高等学校まで一貫した文字教育を考える上でのキーポイントであり、現在そのあり方を検討しているところである。

加藤祐司は「発想の転換を図り、「漢字仮名交じりの書」を例えば「書道Ⅰ」において一番先に指導することも考えられよう。古典に依拠しない生徒の作品は実に頼りないものと映るであろうが、これをよりよい作品にするために、個々の生徒が好きな古典を選択し、学習する。その結果を最初の作品と比較しながら学習を進めて行くのである。」⁷⁾と扱い方の一例を示している。教科書どおりの展開でなく、生徒の実態に即した魅力ある設定を模索していくことも来年度の課題である。

さらに、評価の問題がある。「表現技法を習得し、自らの書の高さを測るものさしを得るために、古典の学習はどうしても欠かせないもの」⁸⁾であるならば、書道における古典は評価の物差しでもある。古典の存在しない漢字仮名交じりの書ではあるが、古典の代替としてある一定の基準となる古典を教育現場で設定していく必要があるのではないか。

久米公は「素材となる詩文・語句選びこそ、主体

的表現活動への鍵」⁹⁾と述べている。本稿ではこの「何を書くか」という課題を残したままになっている。稿者の実践では、歌詞・短文など生徒にとってできるだけ身近な題材を選ぶよう心がけたつもりであるが、なお教師主導型である点は否めない。読めればいいのかという問題もある。表現と書いてある詩文・語句との関わりについては、今後明らかにしていかなければならない。

作品のレベルを維持しながら、生徒主体の授業を構築していくのは至難だが、漢字仮名交じりの書は生徒にとっても教師にとってもそこに魅力があるのだと考えている。

註

- 1) 青木香流「現代文体の書」日本書学大系・研究篇 第10巻 同朋社出版 1985
- 2) 『書芸公論』196 1965-7月号
- 3) 「高校『漢字仮名交じりの書』特立の背景、意義、授業の工夫」『墨』第133号 芸術新聞社 1998
- 4) 第20回全日本高等学校書道教育研究会神奈川大会研究発表「独自の表現を追求して」(大会集録1994)
- 5) 1997年度中等教育研究大会における口頭発表
- 6) 「漢字仮名交じりの書の導入期の指導に関する研究」(第14回全国大学書写書道教育学会発表資料1999)
- 7) 学習指導の工夫と改善(8)―生徒が楽しく書にかかわるために―中等教育資料1999-5月号
- 8) 今井凌雪「臨書と創作の関係」(『書を志す人へ』所収) 二玄社 1978
- 9) 前掲書

参考文献

- 石川九楊『近代書の歩み』日本書学大系・研究篇 第9巻 同朋社出版 1988
- 嘉屋孝彦「現代の若者と『漢字仮名交じりの書』」『墨』第133号 芸術新聞社 1998
- 近藤慎南ほか『読売書法講座』9 漢字かな混用 読売新聞社1995
- 中野北溟ほか『書作品のまとめ方』⑧ 調和体 二玄社 1986
- 森下 弘『漢字仮名交じりの書創作指導の研究』萱原書房 1991
- 『近代芸術家の書』芸術新聞社 1986
- 『大澤竹胎の書と版画』五島美術館 1992